

立教英国学院通信

チャプレンより



林チャプレンは立教英国学院の学校付き牧師です。礼拝や聖書の授業ではさまざまなお話をさせていただきます。

忘れてはいけない大切なこと

チャプレン 司祭 林 和広

月日が経つのは早いものでついこの間、本学院に來たと思っていました。今年で三年目の英国の冬を迎えました。聖職になる前、企業に勤めていた頃、上司から三年くらいの月日を通して自分が置かれていくところの状況が少し見えてくると教えられたのを思い出します。

今年の春・夏は日本での学校説明会への出張の機会を与えられました。大小様々な会場での説明会に行かせて頂きましたが、たくさんの方々が会場に訪れていました。各校から派遣された関係者は自校のブリスを綺麗に整え、様々な資料やポップを準備し、自校のカリキュラムや実績、特徴などを丁寧にプレゼンテーションし、それを真剣に聞く来場者の姿がありました。サラリーマン時代にスポーツアパレルメーカーに勤務し、セールス及びセールス・プロモーションに配属されていた私は、展示会や取引先へのプレゼンテーションにおいて自社ブランドを売り込むことが重要な仕事のひとつでありましたが、今回体験した学校説明の光景が企業にいた頃と重なって見えました。学校のブランド化をはからなければ、今後の生徒募集は困難になる、

第二七二号 二〇一五年十二月一日
発行者 立教英国学院

RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND
GUILDFORD ROAD, RUDGWICK RH12 3BE
<http://www.rikkyo.co.uk>

という空気をひしひしと感じました。多くの学校経営者・関係者がこれらのことが急務であると考えているように感じました。競争の激しいマーケットで勝ち抜いていくためには信頼できる商品が必要になると思いますが、現代の多くの学校が打ち出している「主力商品」のひとつは英語教育でしょう。英国の地にある本学院も充実した英語教育を提供するために努力していますが、国内においても海外の学校に負けないくらいに英語教育を提供できるとアピールしている学校がたくさんあります。英語教育の他には充実した学校設備、最先端のコンピュータシステム、図書館、校舎、寮、運動施設、食堂も重要な商品として考えられています。更に優秀な教員による充実した受験指導や進学実績も魅力的な商品として挙げられるでしょう。カリキュラムや教員の質の向上というソフト面と環境・設備等のハード面の双方を充実させて「魅力のある学校」作りに動んでいるわけです。そうした状況下にある多様な学校の中で、立教英国学院という学校が何を大切にしているのか、何を伝えていくのか、そうしたことを自分なりに思い巡らしてみます。

英国にある本学院は、英国の地の利点を生かした充実した英語教育、自然に囲まれた教育環境、徹底した少人数教育、全寮制という共同生活などのセールスポイントを持つていると言えます。しかし、本学院が本来、最も大切にしているものは、感謝の心をもってきちんと生きることだと思えます。日々、決められた時刻に起き、自分の身の回りを整え、共に食卓を囲み、感

謝してそれを食し、自分に与えられた命に感謝を捧げ、学び、遊び、休むという生活がここにあります。苦手な人とも共に同じ空間で生きる。時間を守り、人の話を聴き、偽ることなく謝るべきところは謝り、他者を思いやり、共に生きることが大切にする。当たり前のことだと言われるかもしれませんが、魅力的なキャッチコピーで溢れる現代社会においては魅力のないことかもしれません。だけでも、人として生きる上で、人生を豊かにするために大切なことがここに秘められていると思います。何事にも感謝して、きちんと地に足をつけてやるべきことをきちんとする、小さなことを大切にする。簡単なようで簡単にはできないことです。日々、意識して行なうことで身につけていくものです。学習の質の向上、サービスを充実させることも大事なことです。もちろんですが、人として生きる上で本当に大切な生き方を伝えることが本学院の教育の土台にあると思います。

もうすぐクリスマスです。二千年前の静かな目立たないところでイエスと呼ばれる神さまの独り子が生まれたことを祝うのがクリスマスです。神さまの御子が生涯をかけて示したことは、多くの人々を魅了するような偉大な行為や言葉ではなく、常に感謝の心、他者を思う心をもって生きるというシンプルなことでした。

人が真に人として生きるため、そして、人生を豊かにするために必要なことは、小さく、目立たない平凡なことの中にあるように思えます。本学院で学ぶ一人ひとりの学院生活が豊かなものとなりますように、お祈りしています。

目次

第7回 チャプレンより	ページ 1
2学期アウティング	2~3
OPEN DAY	4~6
夏休み 読書感想文	7
教科レポート 社会科	8
教科レポート 数学科	9
教科レポート 英語科	9
Cambridge Science Workshop	10
UCL Grand Challenge Japan Project	10~11
サリー大学と進学協定を締結、部活動の活躍	12



コラム
2学期の行事
秋の味覚「Rudgwick Apple Day」
第二の故郷

ページ
6
7
9

ケンブリッジへのアウティング

高一一 櫻澤 菜奈子

今回のアウティングは往復五時間でケンブリッジに行った。天気は晴れ。気温もちょうど良く、アウティングにはぴったりの日だった。

「ケンブリッジ」という名前はよく知っていた。大学があり有名なことも知っていた。だから、私はそれだけでケンブリッジのことを知っていたつもりだった。正直、大学があるだけなのだろうな、とあまり期待はしていなかった。しかし、実際に行ってみるとそれは私の大きな間違い。日本の現代的な大学とは大きく異なり、昔ながらの大学がたくさん並び、午後五時には素敵なクワイヤーの歌声とともに街の明かりが次々とつき、大学帰りの若者の笑い声や話し声が響き、暗くなればなるほど、昼とは違う魅力を感じるようになった。大学しかない静かな町だと思っていたが、逆に大学があることで若者の街を形作り、街全体がひとつの大学の中のように、私はとても憧れを感じた。

また、今回のアウティングに行くと、日本との大きな違いを感じたことがある。それは大学生の違いだ。日本の大学生は、ひとりでイヤホンをつけて、携帯を片手に持ち歩いているイメージがある。しかしケンブリッジにいた大学生は、みんな楽しそうに会話をしている。そこで、私はコミュニケーションの大切さを知った。コミュニケーションによってその街の雰囲気が変わる。その街に行った私たちのような人間が受ける印象が変わる。私はすごく温かい気持ちになった。

日本の大学生も少しでもこういった事に気づいて欲しいな、と思った。また私もこれから意識したいと思った。

2 学期アウティング

P5-M3 THE MAKING OF HARRY POTTER

H1 Cambridge



H2 OXFORD



H3 LONDON





高三の今年の行き先は、ちよつと毛色が違った。いつもなら、テムズ川沿いにそびえるビッグベン(時計塔の通称)で有名な、ゴシック建築の荘厳さあふれる国会議事堂だ。しかし今年はなんと『最高裁判所(The Supreme Court)』と『内閣戦時執務室(Cabinet War Rooms)』だった。

裁判所なんて入ったことがあるだろうか？

裁判傍聴だって経験がない人の方が多いだろう。しかも最高裁判所。日本の最高裁判所だって、どこにあるかバツと思いつかない。一国の最高裁判所に入れる、と言われると、「おおつ」と気持ち盛り上がる。アウティングの十月七日に行われる審理は、その名も『スーパーマークス&スペンサー VS BNP』という会社の賃貸料の返還をめぐる訴訟。見学してみた体験に基づいて、「イギリスの最高裁判所の三大利ビア」を独自に作ってみた。

【その一】 英国の最高裁判所は二〇〇九年に設置された。

【その二】 裁判官はいかめしい黒ガウンをまとい、巻き毛のカツラを真面目にかぶるらしい

【その三】 審理中は裁判官も弁護士(?)も意外に声が小さい

傍聴した審理では、モーツァルト風の裁判官判事ではなかったけれど、声が小さいのにはマイタマイッタ……。ただでさえ、外国語をリスニング、おまけに訴訟の英語。聞こえにくいから、余計に分かりにくいもの。

長い審理だったから、結局最後まで聞けなかったけれど、最高裁に持ち込まれるまで、一体どれくらい審理が続いていたんだろ？と、ふと思った。よく考えたら、今日の審理で決着したんだらうか？ひよつとしたら長く長く続く審理の一日を聞いたのかもしれない。

それにしても『市民による民主的な政治』の象徴の一つが『三権分立』だというのは、なに、最高裁判所の設置がたった五年ほど前のこと。英国では、議会が最高裁判所を兼ねていたと聞いたけれど、この長い間、立法・司法権の兼務で法が乱れることはなかったのか？それが現代まで続いていたイギリスにびっくりだ。

もう一つのチョイスの Cabinet War Rooms、第二次世界大戦中の戦略本部である。しかも地下に作られた戦略本部。第二次世界大戦といえば、ドイツがヨーロッパを占領していたから、この地下基地はヨーロッパの水際の砦ということだ。ますます秘密めいた空気がふんふんするではないか。

では、お勧めの【高三生コメント】による三大みどころを紹介する。

【その一】 なんと一〇〇近くもの部屋がある広さ、しかし閉塞感が強い

「予想以上に広かったが、地下ということもあり、暗くて空気がこもっていて、チャーチルと同じ空気を吸っているかもしれ

れないと思うと感動」

「このような窮屈なところで、みな文句ひとつ言わず頑張っていたのかと思ったが、ガイダンスでチャーチル首相もここが大嫌いだつたというのを聞いて、少し安心した」

「……外の新鮮な空気を吸えずに、働きづめであった当時の人のことを考えると、やはり戦時中のつらさを思い知らされました……」

【その二】 他の士官に比べると、ちよつと豪華なチャーチルの部屋

執務机があつて、ベッドも備え付けられている、少し広い部屋がチャーチルの部屋だった。

「ベッドが(ちよつと)豪華。チャーチルが一晚中寝ることができた日は、三回しかなかったらしい」

「……チャーチルのためのキッチンやダイニング、寝室が、私の部屋よりも小さくて、首相でもこのくらいの部屋に住んでいたんだと、戦争の時の大変さが分かった気がしました……」

「首相ならば豪華な部屋で暮らしてもいい身分なのに、キッチンはずうちの家よりも小さいし、部屋も廊下と思うほど。窓もないし、薄暗いし、居心地悪そうだった……」

【その三】 電話

「形はとてもシンプルだった電話なのですが、色が白・青・赤・緑などがあつて、目にとまるものだった」

電話線はさすがに、天井からコードが垂れ下がっている造り。

アメリカのルーズベルト大統領と直接話せる電話もあった。もちろん盗聴防止機能つき。戦時中の慎重さがしのばれる。

Cabinet War Rooms は、最高裁判所と同じく、国会議事堂のすぐそばにある。つまり官庁街にあつて、今はとても瀟洒で閑静な一角だ。戦争時代の遺産が隠れていると

は想像しにくい。

「本部の真上を襲撃されても大丈夫なのか疑問でした。皆ひとたまりもなく死んでしまふんじゃないかと思つたし、地震がある日本ではできないことだなど思いました」

「日本も先日内閣の地下室が数十年ぶりに開かれていたので、朽ちた状態を修復し、平和の尊さを伝える博物館として一般公開してほしい」

様々な地域を含む、ヨーロッパの大戦に臨んだ人々は今もそこにはいないが、その空間には、ここを歩き、座り、生活していた人々の息づかいがあふれていた。

今年は終戦から七〇年。最高裁判所も地下の内閣戦時執務室も、今の私たちの幸せな生活を様々に思い、振り返らせてくれる、実に良いところだった。今度は時間を気にせず、じっくりと審理をきいて意見をかわし、今は消えつつある戦争の記憶をもっと学んでおきたい。



初めてのオープンデイ

小五 宮崎 ゆめの

一月一日、日曜日はオープンデイでした。小学生は、クラス企画で、クリスマスツリーの由来、飾りや星の意味、クリスマスに食べるお菓子についてなどを、分担して調べました。

一週間前から、オープンデイの準備期間が始まりました。いつもの一二番教室から二九番教室に移動して、オープンデイが終わるまで、その教室で過ごしました。小学生は、背景や模型はなく、調べたことを印刷して貼ったり、画用紙で星やクリスマスツリーの飾りを作ったりするだけでしたが、それなりに良くできたと思います。

オープンデイ当日、二九番教室には、大勢の人が集まり、小学生の企画を見てくれました。予想以上にたくさんの人が来てくれて、たくさんうれしいコメントを書いてくれました。

他のクラスを見て回って、私が一番心に残ったのは、高等部二年二組のメモリー企画でした。この企画では、第二次世界大戦とされた原子爆弾は、一九四五年八月六日八時一五分、地上六〇〇メートルのところで爆発しました。もうあのようなひどいことが、おこらないようにしたいです。

私はフラワーアレンジメントと茶道の二つのフリープロジェクトにも参加しました。

フラワーアレンジメント企画では、商品として七〇から九〇ほどの作品を作りました。しかし三時五〇分ごろ行くと、作品が全部売り切れていて、びっくりしました。この企画は、毎年お客様に人気らしいので、来年も、商品が全部売れたらうれしいです。茶道企画のデモンストレーションは、一時十分から、一時四十五分までありました。この日に向けて、たくさん練習をしてきましたが、六〇人ぐらいの人が集まった本番で

は、緊張して二、三ヶ所間違えてしまいました。

オープンデイが終わり、片付けに入ったとき、お客さんが書いてくれた、たくさんコメントに気がきました。「少ない人数で良い展示ができたと思います。」というコメントや、イギリス人の方が日本語で「wow!クリスマスツリーの糸の玉はすごかった。」などのメッセージをくれたので、うれしかったです。

来年もこのような楽しいオープンデイになるとうれしいです。

中二のオープンデイ

中二 柳田 麗安

立教に入って二度目のオープンデイは、去年とはちがいが、達成感でいっぱいだった。準備期間中に頑張ったこともあるが、なにより、お客さんが楽しんでくれて、また去年よりもハイクオリティの企画を作るという目標をなしとげることができたからだと思う。

去年のことを思い出してみれば、オープンデイがはじめてだったというのを理由に、自分のやるべきことをなかなか見つけれなかったり、うまくいかなかったりして、作業を途中で放り出して、小川先生やあさこ先生にたくさん迷惑をかけたと思う。結果、自分達の納得のいく企画を作ることができなかった。今考えると恥ずかしいが、今年は、完全とはとても言えないが、去年よりはまともになったと思う。各自、やるべきことがあってみんな意見を出しあって、うまくいかないことがあっても、文句を言いつつも放り出さないでいた。それでもまだ直さなければいけないことなんてたくさんある。でもまずは「去年よりも良い企画を作る」という小さな目標を達成しなければならなかった。結果、模型などの賞と総合三位で、自分の中の小さな目標を達成することができた。そしてこれが、

来年のやる気へとつながるのではないかなと思う。

去年よりもまともになったといっても、当然のことができるようになったただけで、けつしてまわりよりも進んでいるわけではない。だからこれからもまわりを見習いながら成長し続けなければならないというのを今回のオープンデイで学んだ。

オープンデイ準備期間

中三 西條 里菜

私にとって準備期間は忍耐の連続でした。

準備期間に入る前、私は一週間勉強に手を付けずクラス企画に没頭できることに喜びを感じていました。準備期間の初日も軽い気持ちで作業に取り組んでいました。しかし、二日目、背景を体育館で塗っている時、全身で思い知りました。『この作業を一週間続けるというのはどれだけの体力・精神力・忍耐が必要なのか』と。しかも十何枚という大きな背景を五人の仲間と協力して一週間で終わらせなければならなかったのです。私は前の学校ではこのような作業にあたったことがなかったのにさらに驚きました。

準備期間で一番辛かったのは精神面でした。予定通りに作業が進まず焦る気持ちばかり募り、皆にストレスや疲労が溜まって行き詰るばかりでした。けれど、互いが互いを応援しあって少しずつ仕上げていきました。そして完成すると辛い気持ち達が達成感に変わり、仲間との絆が深まりました。またこの「耐え忍んでやり通した」ということが自信に繋がりと、勉強や生活にも良い影響を与えてくれると感じました。

私はこの準備期間を経て、自分の忍耐と相手の気持ちを汲み取って行動すること、絶対に諦めない強さが大切だということ、を学ぶことができました。この経験が少し

OPEN DAY

クラス企画一覧

P5.6 クリスマスツリー Christmas tree

M1 寿司 Sushi

M2 ゆるキャラだまし YURUKYARA SOUL

M3 人生行路 The course of life

H1-1 恋愛のすゝめ PLAY BOY HIKARU

H1-2 るろうに剣心 RUROUNI KENSHIN

H2-1 江戸村2015 THIS IS EDO

H2-2 Memory



でも自分の人生に良い影響を与えることができるよう努力していきたいです。

最後で最高のオープンディ

高二―二 江部 あかね

最後のオープンディは、今までで一番難しく、大変で、辛かった。しかし、今までで一番、みんなで考えて、真剣に取り組んだ、最高のオープンディだったと思う。クラス企画のテーマは、広島に落ちた原子爆弾についてだった。今年は、第二次世界大戦が終了して、ちょうど七〇年目ということもあり、このテーマに決めた。しかし、決めた方がいいが、「原爆」というテーマは思っていた以上にデリケートなテーマだった。クラス企画は、イギリス人も見る。どのように伝えることができるのか、日本人目線の意見を前面に出しても大丈夫なのだろうか、そんな話し合いを沢山した。結局、本当のことだけを伝えよう、原爆について考えてくれるきっかけとなればそれでいいのではないか、ということになった。

私を含めてみんな、あまり原爆のことについて詳しいことを知らなかった。背景や模型などの各班に分かれた後は、情報収集から始めた。私は、焼死体の模型を作るようになったので、できるだけ忠実に再現できるように、様々な資料や画像を調べたが、それらは全て想像を絶するものだった。言い方が悪いが、人間があんな風になるなんて信じられなかった。真っ黒になるとは聞いたことがあったが、聞くのと見るのでは、大きな違いがあった。

情報収集の後は、いよいよ模型作りだ。今回私たちは、焼死体を新聞紙と金網で作ったが、予定の日程をそれほどすぎることなく作り終えたので、終わっていなかった他の模型を手伝うことにした。

そしてオープンディ準備期間はあつという間に時間が経っていった。前日の夜、私達のクラスは、全くといっていいほど、終わっていないかった。まだ背景がつるされている途中だった。模型は、背景をつるし

終わってからでないと設置できない。そのため組み立てにどれくらいの時間がかかるのか予想できない。もし組み立てが終わっても、ライトの設置やBGM、様々な物の微調整をしなければならぬ。そんな状態で私達は就寝の時間を迎えた。電気を消されても、不安でなかなか寝付けない。明日の朝だけで、本当に終わるのだろうか。そんなことばかりが、頭の中を占め泣きだした。私にとって四回目のオープンディ。今までこんなにも終わっていないことはなかった。終わらなかつたらどうしよう、そう思いながら眠りについた。

当日の朝、起床のベルの音がした瞬間、ベッドから出て、急いで用意をした。教室まで走り、できる作業をした。クラスのほとんどが、朝食前に教室に集まった。礼拝前、ホームルーム前も。全員が、本気で作業をした。

十時を少し過ぎた頃完成した。無事に完成したときは信じられなかった。完成できた安心感と嬉しさで一杯だった。

次の日、解体作業の時は、少し淋しかった。一週間かけて作ったものが、解体されるのは一瞬だった。そして、結果発表。全ての部門の発表に緊張したが、模型の時は特にそうだった。心拍数が高くなり、結果を聞くのが本当に怖かった。私達のクラスの模型が「一位」と言われた時、言葉にできないほど嬉しかった。近くにいた模型班の子と二人で泣いた。その時がオープンディで泣いた初めての時だった。結局、私達は沢山の賞をいただき、総合優勝できた。最後のオープンディにして、初めて優勝できた。

最後のオープンディ、このクラスで、このテーマでできて本当によかった。高校二年だからこそのできたテーマだと思う。沢山話し合っ、考えた。模造紙には自分達の意見を書かなかつたけれど、私達は一人一人意見を持つている。今回を通して、知る

ということが、まず大切だと思った。知らないのでは、何の判断もできない。情報収集をして、また違う立場から物事を考える必要性があるということも学んだ。

最高のオープンディになったのは様々な人のおかげだと思う。特に、担任、副担任の先生方、ありがとうございました。そして、クラスのみんな、迷惑かけただけど、みんなとやれて良かった。ありがとう。

縁の下の力持ち

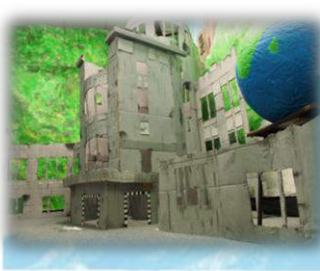
高二―二 牧 拓磨

オープンディの主役はクラス企画やフリッププロジェクトだが、それらをいろいろな角度から支えている人たちがいる。係本部だ。そのいくつかの係本部の一つに会計がある。「会計」、その言葉だけだと事務所の中でカタカタ計算機を使っているようにしか考えられないが、立教英国の「会計本部」は少し違う。

中学三年の時の初めてのオープンディ準備期間で会計本部の人たちが楽しそうに仕事をしていたのを見た時から早二年、会計本部長としてこの作文を書いている自分が少し不思議だ。そこで会計本部長として、この準備期間を振り返ってみたい。会計の仕事はおおまかに道具の貸し出し、作業場の管理・監督だ。聞く限り楽しい仕事と考えるが、実はそうでもない。朝から晩までシャワー時間以外は基本シフトが入っている。一番忙しいのは各食事前とその後。たくさんの方が物を借りたり、返りに来たりする。他にも道具や作業場を大切に使うてもらうために注意を呼び掛けたり、買う必要がある物品等について先生と話し合ったりする。これら以外にも細かな仕事が多いため、クラス企画やフリッププロジェクトにはほとんど参加することができない。それでもその代わりとなるくらいに、この仕事にはメリットがあると思う。一つは、人との触れ合いがたくさんある

ことだろう。いろいろな学年、クラスの人があるため、たくさん話ができる。クラスの進行状況やちょっとした愚痴を言う人。模型の作り方やアドバイスを聞きに来る人。中には物を返すついでに一発芸をやってくれる人までいた。そんな人々との触れ合いは、準備期間ならではのものだろう。もう一つは、会計本部長として仕事を終えた時の達成感は何とも言えないことだ。昨年の自分がいかに楽であったか思い知る程忙しかったが、終わって見た今は、もうたやすく日々のように感じる。なかなか味わえない経験をしたと思っっている。

「縁の下の力持ち」という言葉があるが、これにぴったりなのは会計本部を含む、全ての係本部ではないだろうか。縁の下の力持ちとして自分もしっかり仕事ができただろうか。それは自分に聞くのではなく、第三者に聞くしかないのだろう。



置かれた場所で咲きなさい

高3—1 岡田 千加子
高校ラストのオープンディ。毎年高三は焼鳥やバザー、キッチンといった出し物のお手伝いをする。今回は古本屋のお手伝いをした。実を言うと、私は最初から古本屋をしたかった訳ではない。第一希望のじやんけんで負けて残っていたのが古本屋だったのである。みんな希望通りで、楽しそうな顔を見ていると、やるせなく、苦しかった。私のオープンディは、こうした形でスタートすることとなった。

悪い空気にしたくなかったし、何よりも周りに悔しい気持ちを見せたくなかったから、早く気持ちを切り換えて明るくいうと心に決め、作業に取り組んだ。意外と古本屋の作業は大変だった。本の仕分けや値段貼り、ざっと三百冊ある本を全てロフトや図書館からハットに運ぶ事は、細かい作業でもあり、力仕事でもあった。この作業を終わらせてから、次に装飾の作業に取り組んだ。最初の苦しかった気持ちはいつの間にか消え、みんなを驚かせるような古本屋を作りたい！そう思うようになっていった。他の係の力も借りて、一から装飾



作りを始めた。久しぶりの装飾作りにてこずり、初日にもかかわらず五時半に解散をすることとなった。残り一日。私にできる最大限のことをしようと思うと、たくさんのアイデアが浮かんできて、その日はすぐに眠れなかったのを覚えている。
次の日も朝から晩まで作業をして、ついにオープンディ当日を迎えた。オープンディ前にもかわらず、古本屋のあるハット前にはもう何人か列ができていた。オープンと同時にたくさんの方々が足を運んで下さり、クローズも一時間遅れとなった。何よりも、みんなが笑顔だったのが本当に嬉しかった。
どんな場所に置かれたとしても、その場所ですべてがどれだけ頑張れるか。それが全てだと気付いた。
「置かれた場所で咲きなさい」
これが、今回のオープンディが私に教えてくれた事だ。



【2学期の行事】

9月6日	始業礼拝	10月24日～10月31日	オープンディ準備期間
9月7日	高等部実力テスト	11月1日	オープンディ
9月9日	源氏物語朗読劇 鑑賞	11月2日	オープンディ片付け、オープンディ閉会式
9月18日	個人写真、卒業学年クラス写真撮影	11月8日	実用英語技能検定試験第二次試験（1～3級）
9月19日	Cambridge Science Workshop 報告会	11月20日	国際基督教大学 説明会
9月20日	UCL Grand Challenge Japan Project 報告会	11月21日	CAMBRIDGE 英検 KET、PET
9月26日	ロンドン日本人学校文化祭 訪問	11月24日	CAMBRIDGE 英検 FCE
9月27日	Apple Day 外出 第35回因数分解コンクール	11月25日～11月30日	期末考査
9月29日	全校写真撮影	12月1、2日	答案返却
10月7日	アウティング	12月3日	スクールコンサート
10月10日	実用英語技能検定第一次試験（1級、準1級）	12月4日	ELMBRIDGE VILLAGE キャロリング クリスマス礼拝
10月11日	実用英語技能検定第一次試験（2級以下）	12月5日	終業礼拝 生徒帰宅
10月13日	Surrey University 説明会	12月6日～12月11日	中学部3年生補習
10月14日	全校歯科検診	12月12、13日	中学部・高等部入学試験 A 日程 中学部3年生帰宅
10月18日	生徒会主催 Guildford Shopping		
10月23日	教室、ドミトリ移動		

夏休み 読書感想文

やろうと思ってもできない世界

小五 矢野 正徒

ぼくは、世界でいちばん貧しい大統領のスピーチという本を選びました。ぼくはなぜこの本を選んだかというと、大統領がなぜ貧しいかが不思議だったからです。ぼくのイメージでは、ふつうは大統領はお金持ちだと思ったからです。だから「貧しい」という意味を調べてみました。調べてみたら、生活が苦しいや心が満たされていないなどを書いてありました。ぼくは経験したことがないことです。だから興味をもって読みました。本を見たときは、すぐに読めると思っていたけれど、中身の内容はすぐくむずかしかったです。だからけっこう読むのに時間がかかりました。

この本は、大統領がブラジルで開かれた国際会議でスピーチをした話を書いてあります。この大統領は南米の国ウルグアイからやってきた、ムヒカという名前です。どの大統領よりも質素で、給料の大半を貧しい人のために寄付したり、農場で奥さんとくらしています。古い車を自分で運転して、仕事に行きます。ぼくは、まずここまで読んで、大統領はやさしい人だなあと思いました。日本と比べて、すごい差があると思いました。悪くなった地球のかんきようを話し合う会議でした。色んな国の代表者が貧しさをなくすのにはどうしたらよいのかをスピーチしました。でもよい意見が出ません。ムヒカ大統領は、意見を言う前にみんなに質問するように話し出しました。物をたくさん作って、売ってお金をもうけて、そのもうけたお金でほしい物を買うことはよいことなのか。今の文明はこのようにずっと続いていきます。みんなはいつも「心をひとつに、みんないっしょに」と言っているけれど、それを忘れて、自分

だけのことを考えています。他人を思いやる気持ちを忘れてきています。

ぼくは、シンガポールに住んでいた時、ヘイズという大気おせんを体験しました。インドネシアでは生活するには、とても大切だとお友達から聞きました。でもそのけむりでマレーシアの人とシンガポールの人はとても苦しみました。インドネシアはわざとやっていないのに、みんなからいやがられました。でもどうしたらいいのかわからなかった。まだ解決していません。

ぼくは初めて気が付きました。貧しいは少ししか持っていないのははずかしいことではなく、なんでもほしいが心があつて、それでもいくらあつても満足しないことが本当の貧しいことだと初めて知りました。そして、他人を思いやる気持ち、みんながしあわせになることが一番大切なことも初めて知りました。どうしたら人にめいわくをかけないで、生きていけるのか、どうしたらしあわせが最も大切だということを知ってもらえるのか。ぼくたちが生き方や物のみかたを考えたほうがいいと思います。例えば、火薬は戦争に使う物ではなく、花火や色んな物に使う物で、みんなを喜ばせるために使つてほしい物と考えてほしいです。これはテレビで誰かが話していたのでよく分かりました。

この本は、ぼくに色んなことを気づかせてくれた本でした。ぼくは言わないと気がつかないで、こういう本がどんどんでたらいいなあと思います。そして、ムヒカ大統領が言ったことをぜつたいにわすれないようにしたいと思っています。

「モモ」を読んで

中一 吉岡 美緒

時間、それは、人間が人間らしく、豊かに生きることを可能にしてくれる、人生というものの、原料であると思いました。

私が、今回読んだ「モモ」は、年齢もどこからやって来たのかもわからない、不思議な才能を持った女の子が、人々から時間を盗み生きている集団、灰色の男たちから大人たちの盗まれた時間を、愛と勇気の手で取り戻すお話でした。

私が、この本を読んで感動したのは、女の子が時間をつかさどる人物に会い、時間そのものについてを考え、出した答えでした。「さわることはできない。つかまえてもひびいてるものなのよ。とおくから聞こえてくるけれど、心のふかいところでひびきあっているものなのよ。」

私はこの四文が今まで心の中で、霧の様に漂っていた。時間というものの答えが、明確になったような気がしました。と同時に、現代の時間と戦いながら生きる社会に産まれた私たちは、本当の意味での時間というものがどれだけ素晴らしいか、気づかないで過ごしている人が、実はとても多いのではないかと思います。

立教は、確かに朝の準備は二十分しかなくて、夜は遅いときもあり、時間があまりないと思っていたけれど、自然豊かな英国という地に囲まれて、生きることができるとは、同じ時間の中で、とても良い人生の一部と将来なるのだらうと思いました。また、人生で大事なことは、なにかで成功することでも、たくさんのもや、権利を握りしめることでもなく、生きることのほんとうの素晴らしさを考え、素直な心で人生という道を見て、真つすぐに歩んでいくことだと、本書を通じて、学ぶことができました。

そして、本というものは、人生を豊かにしてくれるスパイスだと思いました。



秋の味覚「Rudgwick Apple Day」

9月27日、毎年恒例の地元のApple Dayというお祭りに希望者全員で出掛けてきました。

立教の地元Rudgwick村で開催されるりんご尽くしのイベントは天気にも恵まれ、多くの地元の方々が来場していました。会場には様々な種類の店が並んでいますが、どの店も家族や友人と出しているのが非常にアットホームな雰囲気です。

人気があったのは日本では珍しいりんごのフレッシュジュース。りんごを潰してジュースにする様子が実演されて、とても甘い生のジュースを味わえます。他にも立教生に人気があったのはhog roastという豚の丸焼きです。りんごの特別ソースをかけて、パンズに挟んで頂きます。お腹が減っていて二個以上食べたという生徒もちらほら。もちろん英語でオーダーします。青空の下、友達と食べるお昼は格別です。

このApple Dayの目的は地域のイベントに参加するだけではなく、11月1日に行われる立教のOpen Dayのチラシを配るためでもあります。下級生も勇気を出して、英語であいさつをしながら一生懸命宣伝をしていました。地元の方は立教のことをよくご存知のようで、当日を楽しみにしているとのこと。生徒たちも好意的な声を聞くことができて嬉しそうです。

今回も小学生から高等部三年生までが参加しましたが、生徒皆イギリスの週末をリラックスしながら楽しめたのではないのでしょうか。観光客ではなく一住民としてイギリスの文化に触れることができた経験は一生モノ。これからも積極的にイギリス文化を見て感じて成長してほしいと思います。



教科レポート

社会科

クリスマス・プレゼント・ボックスづくり

へ二〇一五年 二学期の小学生フィードバック

チャリティー・クリスマス・プレゼント・ボックスづくり

皆さんは靴の空き箱につめた、クリスマスプレゼントというものを知っていますか。教会のチャリティー活動のひとつに、それがあります。靴箱はそこその大きさのものが入って、しかも角形で丈夫。その靴箱に、様々なものを詰めて、クリスマスに贈るのです。地元克蘭リー村には、Children's Shoebox Appealという協会があり、ルーミアのあるまじしい村へ毎年多くのクリスマスボックスを贈っています。そんなプロジェクトに、小学生も参加しました。

保護者の方達に連絡をしたあと、子どもたちに「靴の空き箱にプレゼントを詰めてある人に贈ろうと思うのだけれど」と切り出し、村の人々の写真を見ながら、どんな人達だろう？どんな生活をしているだろう？とあれこれ意見を出して考えたら、自然に、どのようなものを詰めると喜んでもらえるかな？という方向へ。「贈りたい」という気持ちが生えたところで、贈る相手の性別と年齢を決めることにしました。男子チームは「自分と同じ年代なら何が分かるといいかな」と、女の子チームは「ちよつと小さい女の子なら、どんなものが欲しいか考えやすい」そうなので七歳前後の女の子用をイメージして、準備する

ことが決定しました。

気持ちが大切なので、週末のスクールショップでお菓子が買えるぐらいのお小遣いを一人ずつ出して、十二ポンド以内、三人で一つのクリスマスボックスを作ります。実際にTESCOスーパーマーケットに買い出しに行き、予定の買い物リストと商品の値段を見比べながら、買い物カゴに入れるものの、一二ポンド以内で買うのはかなり難しい！贈る意味と値段を比べて、考え込むことになりました。

さて、スーパーマーケットにやって来た小学生達。スーパーといっても、TESCOという、おもちゃやDVD、家電製品、衣類までそろった英国ではおなじみの大型スーパーマーケットです。女子チームは、リストに従ってあれこれ見ながら、決めるのにとどめて悩みました。子ども用の歯ブラシにすると、かわいいし、子どもの口サイズだからぴったりだけれど、一ポンド以上もする。大人向けの歯ブラシにすると、二五ペンスで二本入りだけれど、ちよつとそっけない。子ども向け歯ブラシは三歳以下用だし、大人向け歯ブラシにすると二本あるから長く使えるけど……「色の組み合わせが赤と緑でクリスマスカラーだから、大人用にする」児童自身が考えて決定。色鉛筆セットとぬり絵を買うときには、鉛筆削りで悩みました。「色鉛筆なら鉛筆削りがほしいなあ」「でも鉛筆削りがついたものにすると、高くて他のものが買えない」「クレヨンなら安いよ。クレヨンにしよう？」「クレヨンは手が汚れない？」「じゃあ、クーピーにしようよ。削らなくていいし、使いやすいし。」九点買って、残り一、

六ポンド程度になった時、「女の子だから、最後はクシを一本入れよう」と意見がまとまりました。

でもクシは二ポンドもする。さて、どうしよう。ちよつとしたお菓子でコイン型チョコレットの小袋を入れていましたが、そこで先生の提案。「五〇ペンスのチョコを返して、クシ一本を入れる、もしくは、一ポンド程度ならボディシャンブーが買えるから、それでどう？」悩んで悩んで、「とりあえず、靴箱に買うものを入れてみよう」と、スーパーの片隅で、申し訳ない気持ちと箱一杯に、「じゃあ、クシの方がいいよ。ボディシャンブーは入らないし。」「チョコレットは食べたら無くなっちゃうけど、クシならチョコレットよりも長く使えるから、それがいい。」と児童たち自身が納得して、最後の一品が決まりました。

男子チームは、買い物に出かける前に、必ず入れるもの、金額的に可能ならば入りたいもの、役に立つもの、クリスマスらしく嬉しい気持ちになるものなどを、細かく思いを計画にして出かけました。が、そのメモを持っていく担当が、スーパーには違う用紙を持ってきてしまいました。でもそこは大丈夫！よく話し合っていました。でも、みんなが買うものをしっかり把握できていました。なかでも、ニット帽子で買える金額のものを見つけたときには、他のものと比べて高価だったのにもかかわらず、迷いなく購入を決めていました。長く使えて、役立つものを、という視点がはっきりしていたからですね。感心しました。

買い物を終えた次の授業時間に、贈る相手のことを考えながら、ていねいにクリスマスカードを書き、箱に詰めてきれいに包装。女子チームが入れたものは、靴下二足、小さなぬいぐるみ、リンス・イン・シャンプー、歯みがき粉と歯ブラシ、ヘアゴム、クシ、クーピー一二色セット、ぬり絵。男

子チームは、ニットの帽子、小さなジェンガ、リンス・イン・シャンプー、石けん、はみがき粉と歯ブラシ、色鉛筆二四色セット、メモ帳、チョコレット、お菓子、一二ポンド以内でうまく買いながら、ざくざく詰めました。

一月一日、克蘭リー教会での礼拝の前に、担当の方に、児童たちから渡して完了です。渡したクリスマスボックスは、協会の方達が車でルーミアまで届けに行きます。輸送用の寄付二ポンド（一箱あたり）は、先生たちからの志。「いいなあ、こんなクリスマスボックス、私もほしいな」小学生女の子の感想。みんなの少しづつの気持ちが集まって、素敵なクリスマスボックスが出来上がりました。



数学科 / 因数分解コンクール

「因数分解はラジオ体操」因数分解コンクールの冊子には、そのように書いてあります。日本人が昔から親しんできたラジオ体操。今日では都会のオフィスであの音楽が流れることは珍しくなりましたが、長年日本人の健康を支えてきた習慣です。実は立教生は毎朝、当たり前のようラジオ体操をしています。因数分解はそのラジオ体操と一緒に、当たり前のよう、毎日コツコツと、頭の健康のためにやるということです。

二期が始めてすぐの食事の席で、何にでも全力投球の立教生が、私に「因数分解コンクール、勝負しましょう」と言ってきました。よし、やってやろうと、生徒と一緒に頑張って取り組みます。因数分解に本気で取り組むのは高校時代以来のこと。さび付いた頭をなんとか動かします。毎日練習問題を解いていると、しだいに歯車が回り始め、「この時はこうしよう」と反応できるようになってきました。昨日解けなかった問題は、何分も考えた問題が解けたときはやはり気持ちが良いもの。解き終えた生徒たちは得意になって、解法を解説し合っていました。皆で真剣に取り組む、この繰り返しが大切なのです。ラジオ体操は、毎日やっている人たちにとっては、何も考えなくても体が反応するものです。因数分解も、日々の積み重ねで反応できるようになります。

本番の六〇分間は、皆が集中を切らすことなく、ペンを走らせる音だけが聞こえてきました。六〇分の一〇〇問というのは大変で、かなりのハイペースでないと最後まで終わらせることができません。生徒たちはさすがに慣れていて、とても早い。少しはカンがよくなった私ですが、柔らかな生徒

徒の頭の回転には、とてもついて行くことができませんでした。

成績優秀者の結果は速報として、その日のうちに発表されます。私も本気になって取り組んだ因数分解。結果はさんざんたるものだったので、九〇点以上をとった生徒達の格好良さを心の底から理解しました。立教生はとてつもない能力をもっている。それは因数分解を毎朝のラジオ体操のようにコツコツと取り組む、その絶え間ない努力です。今回は本意に終わった生徒達も、来年は彼らのようになろう、そう思っただけに違いありません。私もその一人として、またコツコツとやっていくつもりです。

英語科 / インタビュー

今学期の中一のフィールドワークでは地元の大規模スーパー、TESCOへ行き、現地の人に英語でインタビューをしました。先学期はCranleighのお店でインタビューをしてポスターを作りましたが、今回はさらに「話す」ことに力を入れ、全員が英語でしっかり質問することを目指しました。

しかし、いざTESCOへ行くと声をかけるのはやはり緊張してしまいました。尻込みしてしまう場面もありましたが、勇気を振り絞って「Excuse me」と声をかけると、ほとんどの方が笑顔で質問に答えてくださいました。中には「質問は一つだけ？もっと聞いていいわよ。」と優しく声をかけてくださる方もいらつしや、生徒も楽しくインタビューができました。

そして二期最後のフィールドワークの日には、とても素敵な出会いがありました。TESCOの店内もクリスマスモード。そこでクリスマスディナーに何をつくる

のかということをおるご婦人に尋ねたところ、「あなたたちは立教の生徒ね。実は昔、私は立教で英語を教えていたのよ。あなたたちが一生懸命英語を学んでいる姿勢がとてもよかったわ。よかったらクリスマスカードを交換しましょう。」そう言っただけで住所を覚えてくださいました。この偶然の出会いと自分たちの英語が通じ、それが相手の気持ちを動かすことができたという二重の喜びがあったようです。「先生、こんなことってめったにないよね！」と話す生徒の表情は今学期のフィールドワークで一番の笑顔でした。

早速みんなで心を込めてクリスマスカードを書きました。お返事は冬休みを過ぎた後、三学期のお楽しみで。来学期も新しいことにチャレンジして楽しく英語を学びましょう。



第二の故郷 高3-2 竹内 貫太
今回は今、自分が住んでいるオランダについて説明しようと思う。

Nederland「低地の国」

これがオランダ語でのオランダ国名だ。英語では、Netherlandsになる。

「世界は神が作ったが、オランダはオランダ人が作った」

と言われるように、海岸沿いに広がる湿地を干拓することにより、土地を広げてきた歴史がある。そのため、オランダは4分の1以上の土地が海面下にあり、何世紀にもわたって水と闘ってきた。

干拓とは、遠浅の海や干潟を仕切り、その場の水を抜き取ったり、干上がらせるなどして陸地にすることだ。

オランダの風景に必ずある堤防、風車、運河はすべてこの干拓に関係がある。

まず、堤防で水域を仕切り、何か所かに水門を設け、動力によって強制的に仕切り内の水を排水し干上がらせるのだが、そのときに動力として水車を使った。運河はくみあげた水を注ぎ込むために作られたものだ。オランダの地名にも干拓にまつわる名前が多くあり、ダム(堤防)という意味からアムステルダムにダムを築き、都市を建設したアムステルダム、ロッテ川とマース川に流れ込む地点にダムを作ったロッテルダムなどが、わかりやすく代表的だ。

中学二年生のときに初めて訪れ、高校三年生になるまで住んでいた。自然に恵まれた美しい運河の街に、このように、水との闘いとも言えるオランダ人の苦労があった事を忘れてはいけないと思った。



高二—二 丹葵

「はい。これから一分間、近くの人とこれについて話して。」

その時、私は、ここからワークショップは始まっているんだと実感した。

ケンブリッジ大学にコーチで到着して少しした後、私達は大きなホールに召集された。その席は、自由だったが、あまり同じ学校同士の子で座ったり固まったりはしてなかった。それがまた後になってみれば良かったなと思う。

オープニングセレモニーなので、ケンブリッジの歴史についてなどを紹介してもらって終わらうと予想していた。確かに、教授の挨拶、そしてケンブリッジの歴史や入学方法の話があり、そこまでは予想通りだったが、次はまったく想定外の話だった。教授が、ある女の人を連れてきて紹介し、その女の人が少しプレゼンを行うと言った。その話は脳の話で、主に誤記憶の研究についての話だった。

彼女の話は、とても興味深く、聞いていて楽しかった。中盤辺りになると脳に関するクイズが始まった。その時間聞いたのがあの没頭の言葉だ。ある二つの脳の図を見せられ、それぞれ脳のどの部分を使っているかが表されていた。そしてそれが、どんな人の脳なのか。図から自分で考え周りの人と英語で意見を交換し合うというものであった。いきなり、これから一分でと言われ少し焦ったが、案外口は勝手に動いていた。ちゃんと理由も話す事が出来た。また、他の子の、自分とは違う意見がユニークだったり、感心する事もあり、その話し合いが楽しかった。この時、考える事の楽しさを学んだ。

今回のワークショップで学んだ事は沢山ある。プログラムごとに分かれての研究、いつも学校で行う実験は、誰かが成功した実験の真似だ。けれど、今回は違った。まだ今も改善の為に実際に研究を続けてい

る内容だった。そこには、結果の見えない実験の楽しさがあった。コンピュータ・プログラミングで結果を予想する。そして、次に実験をする。もちろん最終的な結果は予想と異なる場合もあった。そんな時、何故結果が違ったのか。自分達で考えその要因を導き出す。それがなにより楽しかった。また、専門分野の内容はやはり難しいと感じた。知識が無い分それを頭にいれるのが大変だった。正直辛いし最初は思ったりもした。学んだ事は多かったが、一番大切なのは、何に対しても疑問を追求する事と、積極性の二つだと感じた。まだまだ世界には沢山謎がある。それを、一つでも解き明かしたい。その為に今私が出来ることをしっかりと、沢山の知識を身につけようと思った。



UCL Grand Challenge Japan Project

“One world, one summer, one dream”

H3-1 Risa Suzuki

This summer I had the great honour to participate in the UCL Grand Challenge Japan Project. It was organized by UCL in order to celebrate the arrival of the Chōshū 5 and Satsuma students at UCL which symbolises the beginning of the friendship of England and Japan around 150 years ago. Many people in Japan would have probably glanced at me wondering why I participated in this project since it is my last summer before my university exam and I should better concentrate on my studies but I do not think that way. This is because this project was exactly what I have longed for. An opportunity to think and discuss about culture, the world and its future with its issues it is facing.

The greatest memory I have from this project is the day where UCL has prepared two discussions for the English and Japanese students.

One was all about comparing English and Japanese culture from many aspects. I was part of the group which discussed about stereotypes and I personally enjoyed this the most because the group was small and everyone was nice and open for jokes. It was not only the fact that I could make myself understood in English that made me happy but also the fact that I could enjoy my conversation which I held with the English students having a lot to laugh about. In my humble opinion this is something which is not easily be done as normally talking a non-native language is quite challenging and you do not have enough power to think about enjoying it. But this time it was different. Everyone was understanding about the difficulty of speaking another language and helped each other sharing jokes about stereotypes and ideas. The most satisfying point for me personally was that all of the members of my group agreed on adopting my idea of how to present the results of our discussion which made our presentation look like a little debate involving the audience.

The other one was called "future pioneers" and was all about the world and its future in relation to what we students think about it, how we are going to approach issues which exist in the society. I liked this discussion as its topic was kind of related to my dream profession. My dream is to do humanitarian work helping developing countries and I was able to express my opinion to other people and see their reaction as well as hear their opinions. As we were discussing topics like agriculture, discrimination, trade it made me think of developing countries and I feel like I have learned some new facts.

Through this project I felt like getting closer to my dream and it made me keener on fulfilling it. Therefore I am very grateful to have been able to attend it and I am glad to have met such nice people and I hope that I can form with them a new world.

「英語はツールだ」

高三——三村 美優

このワークショップの開催を知ったときどうしても参加したい。そう思い、選考の作文で「必ずや立教生として活躍します。」と思いをこめて記した。その強い思いが功を奏したのか選ばれ参加することができた。受験生が、と思う人もたくさんいただろうが、きっと何かがある。何かが変わる。どうしても、と強く思った。自然に出てきた「立教生として」という言葉の重さに負けないように、と気合が入った。

プログラム開始前日に、参加する日本人全員が集まって立教英国学院で一日を過ごし Ice Breaking をした。一概に日本からと言っても International School や現地校に通っていた子、海外生活経験のある子、日本で過ごしてきた子、その中には県から派遣されてきた子もいて様々だった。初めは長旅で疲れ、緊張していたためもあるが数時間もすればみな打ち解け、それぞれがもつ空気の違いを感じた。知っている空気、知らない空気、身近な空気。どれもみな新鮮に感じた。翌朝まだどこかきこえない笑顔の集まった集合写真を撮った。

初日の夜にイギリスで活躍する日本人として理学科、音楽系から六人の日本人の方によるパネルトークが開かれた。話題はなぜ、どのようにして海外で活躍するにいったったかというものが中心だった。印象に残ったのは、海外で活躍するための人一倍の努力はもちろんだが、もうひとつは「外へ。海に向こうへ。まだ知らぬ世界へ。」という六人がかつて抱いたとおっしゃった思いの強さだ。強く思い描くことはいつか現実となるのだ、信じていたいその言葉が身近になった気がした。そして海外で生活していく中ではぐくまれていく祖国愛、より日本人らしい、日本人としての意識と誇り。私はまだ学生としてしか生きたことはないがすごく共感できた。そして何より

も堂々としたあの六人の姿、自分の能力を鼻にかけない低姿勢は私に「本物」として映った。

翌日は今回のメインイベントであった UCL のホールでのディスカッション。今回のテーマ Intercultural Interaction をベイスとし日英の交流から派生させた様々なテーマ、国際情勢について話し合いが行われた。私は楽しみで仕方なかった。日頃から外の世界のニュースにアンテナを張るようにしていたことが身を助け各班それぞれに提示されたどのトピックについても考えが湧き出た。そのイベントには UCL Academy の生徒、イギリス現地校の生徒、UCL 大学院に留学している方々、そして私たち日本人生徒、薩摩藩士が UCL に留学して一五〇年を記念し鹿児島県から派遣された職員の方々が参加した。私は Immigration というトピックを選んだ。昨今不安定なこの社会で誰一人目を背けてはならない問題。しかも特に深刻な問題を抱えるヨーロッパに住んでいる私にとって身近な問題だった。

私が始めるはじめに先学期学校の Critical Thinking の授業で学んだことをもとにイギリスの移民排除の機運を UKIP についてを切り口に提起すると、インドから両親の代に移住してきた子がこの国への定住の難しさを両親の経験を交えて話し、その議論から話は外国人である留学生がこの国で就学し、就職することの難しさに移り、今まさにその境地に立っている中国とシンガポールから UCL の大学院に来ている留学生が現状を話してくださった。その後、日本で同じような問題があるのかという話になり私が中心となり知る限りの現状を話した。皆それぞれの育った環境、家庭背景、将来の展望などが異なり、意見は予想したよりも多様で活発だった。最終的に私たちの班は英国へ留学、移住をするときに生まれる障害を中心に話をまとめ私

たちが考える移民問題のひとつの意見とした。

その話し合いの最中に気づいたことがあった。この現代社会の多様さ、私たちに課せられている途方もない課題についての再認識はもちろんだがもうひとつあった。それは隣に座っていた鹿児島県職員の方が「すごいね。自分が情けない。大学で遊んでいる場合じゃなかった。」独り言にも聞こえる大ききでつぶやいた言葉が教えてくれた。

あたりを見回してみた。彼が「すごい」と口にしたような議論の中心となったり活発に発言をする日本人の姿は半分いただろう。会話に参加しうなずくものの声を聞かない日本人の姿もあった。もちろん日本から来た全員とても意欲的に勉強を重ねてきていることは見ればわかったし、英語の能力が足りないような人はいなかった。決めつけるわけではないが迷いなく自分の意見を述べていたのは海外経験のある人が多かったように思う。もちろん私も自分の英語力に一切満足はしていない。

だがその場に参加し、考えを持ち、共有したいという思いは英語で発言することに対する羞恥や迷いを打ち消した。これは今までの生活や父の影響が大きい。しかしもつと伝えたいのに、この思いを、ともしかしい思いをたくさんした。そこでの経験の瞬間、一瞬は次から次へと私の課題をあぶりだし、私の「もつと学んでいきたい、学ばねば」という原動力へと変わっていった。私は皆の前で、隣の職員の方に私の意見について何かありますかと聞いてみた。すごく緊張した顔をされたので悪いことをしたかな、なんて思った。でもそんな思いはすぐに打ち消された。グループの誰一人として彼がしゃべる間、会話をさえぎる人はいなかったし、みんなが彼の意見に興味を持ち耳を傾け、理解しようとした。これか。どれほど英語を流暢に話せるかじや

ない。何を思い、考え、伝えるかなんだ。

「英語はツールだ。」

頭で理解していたつもりこの言葉が突然形を持ち、手でしつかりとつかめた気がした。

自分のやってきたことは間違っていない。そう思うことでよりこれからの将来に対して意欲がでた。寮に帰ると明らかにその日の朝とは違う顔をしている仲間をたくさん見た。勉強を積み重ねていく、その日々の努力は大前提だ。だがやはり実践に打ち勝つものはないんだ、身にしみて感じた。そしてその実践の場におくことは容易なことではない。時間も費用も途方もなくかかる。そこで自分の立場を振り返るとやはり恵まれた環境にいと再確認した。しかも立教英国学院は、日本人の学校が海外にあるという性質上日本人であるという視点を基盤にして海外の空気、教育に触れることができる。それはより祖国の姿を浮かび上がらせるもつとも近い道であることなのだと思いがつくことができた。

私は今週末に全校生徒の前で行うこのプログラムの報告プレゼンテーションの準備を今している。そこで今回得たもの、そしてわたしたちが恵まれた環境に身を置いていることを再確認したこと、そしてこれを使わない手はないということ。ここでのこの国での経験は私の血肉となりきつと将来を豊かにする。そのことを多くの人にわかってもらえるようにいいプレゼンテーションにしたい。

私を派遣してくれた学校、両親に感謝し今日からまた新たに気を引き締め将来の展望を描きながら日々精進していきたい。

サリー大学と進学協定 を締結しました。

十月三日(火)、サリー大学(University of Surrey)と立教英国学院との間で、進学協定を締結、調印式を執り行いました。

サリー大学は、立教英国学院からほど近い Guildford にある総合大学で、最新のタイムズ紙の「The Times and Sunday Times Good University Guide 2016」で今年の University of the Year に選ばれた名門大学です。

特に学生の満足度がイギリスで最も高く、施設・設備が充実していることで知られており、世界大学ランキングでも上位に位置するトップクラスの大学です。

この協定により立教英国学院の生徒で在学中に一定の成績を修め、規定の英語資格を取得した者は、サリー大学の International Foundation Year のプログラムへ進学できます。このプログラムは二月から九月の半年コースか、九月から六月の一年コースがあり、修了後はサリー大学の各学部へ進学が可能です。イギリスの学士コースは三年間ですので、合計三年半または四年間で学位を取得することが出来ます。

イギリスの大学との進学協定は、一月に締結したUCLロンドン大学に次いでこれが二校目、日本の高校レベルでの提携は本校が最初となります。既に二〇一五年度より教育課程に英国大学進学コースを設置しており、今後もイギリスをはじめとする海外の大学への進学を積極的にサポートしていきます。



UNIVERSITY OF
SURREY

バレーボール部 BEDE'S CUP

女子、男女混合 総合優勝



Flower show is a riot of colour

THE 70th Ellens Green and Rudgwick Gardening Association Autumn Show proved to be a 'very successful' gathering of local horticultural and artistic talent.

Held in the Ellens Green Village Hall on Saturday September 12, summer still lingered in the hall, where visitors viewed a riot of colourful dahlias, roses, shrubs, fruit and vegetables.

The local art group

exhibited some of the year's work in media such as acrylic and watercolour.

Home fare exhibits included Woolton Pie based on a wartime recipe to mark the association's anniversary.

Association chairman Michael Clarke said: "No meteorological year is ever perfect for gardeners but 2015 provided a first class selection of prize-winning flowers and vegetables.

"We were particularly

pleased that the girls from Rikkyo School submitted floral arrangements. Their exhibits were stunning."

The prizes were presented by Dr David McKenzie from the Rudgwick Medical Centre.

Kate Robertson, honorary secretary, said: "Ian Clemens won most of the silverware. His dahlias would have held their own at Chelsea and his elephant garlic lived up to its name."

フラワーアレンジメント部
地元の新聞に掲載